

普賢の徳に

南無阿弥陀仏が至純絶対な大行であり、道であり、無上命法である限り、南無阿弥陀仏は人格的生命であり、その全体である。

南無阿弥陀仏は大乗である。

大乗であるが故に、一切衆生の全てが救われるのであるが、しかし同時に万人ことごとくが、これをぬきにしては、真に人格の尊高の發揮は不可能であるということである。救われぬと言うことである。誰も彼も賢くなろうとする。確かに賢くならなくてはならないが、しかし、その多くは『特賢』であつて『普賢』でない。南無阿弥陀仏の大行は『普賢』の徳の成就である。大乗とは普賢の徳の發揮である。

聖人が行巻において

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に至りて、大般涅槃を證す。普賢の徳に遵ふなり。知るべし。」と。

大般涅槃を證すること、即ち成仏することは、やがて普賢の徳を發揮することである。それは浄土に至つて後のことではないかと言うならば、大変な間違いである。蓼は二葉の間から辛い。彼岸において完成せられる道を現在から着手するのである。されば、龍樹も天親も、乃至、源空、親鸞両聖人も、皆、普賢の徳に生きぬいた方である。

普賢菩薩は、諸仏を敬礼し、称讚し、業障を懺悔し、功德に随喜し、仏道を学び、やがて衆生に随順し、共に広大なる仏道に生きようとする。上求菩提下化衆生の菩提心である。

真に普賢の徳に生きるものは、自ら普賢の徳に生きたと自惚れはしないが、普賢の徳に生きた人を拜む。人の上にそれを拜む人である。

「安樂無量の大菩薩、一生補処にいたるなり」

普賢の徳に帰してこそ、穢国にかならず化するなれ。」

この御和讃にあらわれた、還来穢国の相は大悲の相であり、又同時に念仏に生きた聖人の相である。我が前に立ちたまう善知識の相である。

普賢と特賢。一個人が持っている何ものかを主張んとする我執は、その人を小乗の独覚にしてしまう。一個人の成せることは大きいようでも小さいものである。一個人の歩みの上に、普徧広大なる仏の全てが生きた時、光芒よく幾百千年の後までも衆生を動かすのである。

多くの人は、いよいよ重患の床に臥するや、我慢、横暴、混乱、毒舌、等々の醜状のみを暴露して、何ものもなくなるものである。私は又しても念仏の大往生をとげた父を憶う。いよいよ脳症が重くなつて、たわごと、うはごとのみ出る時に當つて、唯念仏と読経のみになつてしまつたのであつた。細胞の一つ一つまでが念仏に薫習して、出る息も入る息も大行そのものであつた。あの尊厳嚴肅な病室を忘れることが出来ない。

無産陣営の闘士Zさんは、一夜私に「階級的人格の完成」を絶叫して聞かせた。彼と夜を徹して語りつつ、その真摯な、真剣な生活態度と求道ぶりには全く一本まいつてしまつた。

大乘的人格の完成を忘れてしまつた宗教の陣営を思う。そして千万無量の感慨を禁ずることが出来ない。

大乘的人格の完成！ そのことをぬきにしての宗教運動はあり得ない。

我が全戦線の同志よ！ 大乘的人格の完成だ！ 金剛不壊の信力だ！ 鋼鉄の如き実践力だ！ 熔岩流の如き信義だ！ 春のような温かさだ！

個我の主張を葬つて、普賢の行願に生きるのだ！

龍樹菩薩は、菩薩求道途上において二つの墮ちる坑があると言つた。二乗と、地獄とがそれである。しかも地獄には、一度墮ちても救われるが、二乗に墮ちれば「菩薩の死」であると言われたが、この警戒の誠に真実であることを日に日に痛感せしめられる。二乗とは、菩薩道、即ち普賢の徳を遠ざかれるものである。

2

独覚（縁覚）の世界ほど世に恐るべきはない。彼は個人の世界に立籠つて出でないものである。全てを知つたと自惚れて、求道心を失えるものである。己れより賢いものゝおらない人である。三世を貫く大道をそれて、殻に入つてしまつた人である。彼にはとても強力な大鉄槌が下らぬ限り、聞くことも、知ることも、彼の我慢の壁の上塗り以外にはならぬであらう。地獄の人を正道に誘うよりも至難であり、絶望である。而して真の合掌念仏、懺悔業障等をぬきにして「話」を聞かせば必ず菩薩に似た独覚が出来る。

暴力压制、権力独裁の英雄主義も、遊蕩破倫、自暴自棄の享樂主義も、悪差別、保守主義の利己的個人主義も、悪平等の破壊、反逆主義も、全ては、私の発展せるものである。大乘は無我である。私の否定である。其処に中道が生れる。

念仏の中に、智慧光の大否定によつて、それらの呪うべき悪魔の本拠をくつがえさるべきである。

不よ。御地の聖戦、大乘陣の再建は誠に至難であることを信ずる。だがそれだけ、張り合いがあり、闘争の意味があるではないか。卑劣なる嫉妬、宗派心、優越感、排他、陥穽等々から生れ出たデマの嵐が吹きまわると、その中に、大行のタンクを

悠々とおし進むべきである。そこに禁物は、謙讓に似た卑怯と、精進に似た区々たる策謀と、平和に似た妥協と、他力に似た無力と、金剛力に似た我執等である。

真に六字によつて生きる友を一人つくれ。一人出来たら又一人つくれ。鋼鉄の杭一本、又一本、それに結ばれた太い綱が、全国の同志と結ばれる。

反動無明の嵐、おそろるべからず。強力一貫の歩みなきをおそろるべし。大乘の腹、合掌念仏の一道、他の何ものをもつても人に接する勿れよ。

「乃公出でずんば」という言葉は、普通気取つた者の稚氣を嘲笑する侮蔑の言葉とされている。誠に、俺ほど賢い者はない、己のやっていることだけは正しい、俺が出なければ、と言つた式の自惚れや気取りは、笑ふべき噴飯事であるに違いない。しかしそれは「乃公出でずんば」の悪い方面のことである。「ただこの事一つに生きる」という自信のない処には生活はあり得ない。この意味でなれば、必ず誰でも「乃公出でずんば」であり、なければならぬ。

Wさんは「千万人と雖も我行かん」だと言つた。それがなければ一貫の生活はあり得ない。

聖者も世の毀誉褒貶を超えて歩み、悪逆も亦世の風評などに耳をかきぬと言う。悪の顔、皮の千枚張、悪度胸決してほむべきでない。敏感なること、湿度計の如く、しかも一道を歩みきらねばならぬ処に道の意義がある。

我をして素純ならしめ給え。しかも我をして強者たらしめ給え。

『探玄記』に普賢を解釈して曰く「徳、法界に周きを普と言ひ、至順、善を調ふを賢という。」と。

「徳法界に周きもの」とは仏のことである。仏は普遍広大なる真如法身を体とするが故である、涅槃に住するが故である。而してこの涅槃の血液、念仏衆生の上に、菩提心即ち信心となれば、衆生も亦、広大なる徳に生きるのである。されば、源信僧都は『往生要集』に作願門を説くに當つて、

「凡そ浄土に往生せんと欲はば、要す須く菩提心を発すを源となすべし。如何が菩提なる。乃ち是れ無上仏道の名なり。もし心を発し仏と作らんと欲せん者は、此の心広大にして法界に周遍し、此の心長遠にして未来際を尽くす。此の心普く備て二乗の障を離れ、若し一たび此の心を発せば、無始生死の有輪を傾けん。」と。

何という雄大なる文字であろう。「この心広大にして法界に周遍し、此の心長遠にして未来際を尽くす」とは普賢の徳を説かれたものである。されば我等は、如来廻向の大信心において、普賢の徳を受領して正定聚の人となるのである。

「至順、善を調ふを賢という。」

善を作すも、それが少善根である限り、浄土へは通じない。又もし善を作すも、我を根底とする限り、調つてはいない。調つていないならば、却つて自他を損うのである。普遍慶大なる大行こそは、至順なる大善であつて、よく一切の善に生命をふきこみ、一切の善を調うのである。人格統一は唯大行によつてのみ可能なのである。

白隠であったか、寺の前の家に住む娘が子供を生んで、それを白隠の子であると誣
いた時、その子を懐にして乳をもらいに歩いたとのことである。世の愚なる人の中に
は、誠に白隠の子であるように思ったり、彼を罵ったり疑ったりした者もあつたであ
ろう。或はそれには何か理由のあることだと、あくまで白隠を信じた人もあつたであ
ろう。しかしその行為はやがて、姪ませた若者を悔悟せしめずにはおかなかつた。私
たちは白隠の上に尊い徳と至順調善の歩みを拝まざるにはいられない。

時には、唯の一言が、その人の人格的不統一を爆露してあまりある場合がある。
時には、何も言わぬ沈黙がその人格の尊高を表す時がある。

私は、大衆開放の名などにかくれて、身心共に放逸無漸無愧に蝕まれてゆくのを平
気である青年を見ると、惜しくてたまらない気がする。

蓮如上人は、御冥見をはじられた方である。何時も相なきものゝ声を聞いて沈黙
し、声なきものの声を聞いて語る人は奥ゆかしい。

もしこの形なきものの心、声なき者の声を聞くことを忘れて生きれば、「あがりあが
りておちばを忘れ」あくまで特賢、独賢になろうとするであろう。他人が一言の挨拶
を間違えたとか、低く買ったとか、そんな小事にも、人格的統一を破つた言動に出る
であろう。もし普偏の徳がものを言う場合には、天地にとゞろく大喝も亦、その人を
傷つけず、人を必ず育てるであろう。

念仏申すべきである。合掌懺悔すべきである。法を聞くべきである。願に生くべ
きである。普賢の徳は汝のものとなるであろう。